

【資料紹介】

## 小川一眞撮影「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」についての考察

岡 塚 章 子\*

### はじめに

東京都江戸東京博物館が所蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」（2冊）は、石版画工であった故喜多川周史（1911年（明治44）～1986年（昭和61））氏のコレクションに含まれていたものである。当館は喜多川氏のコレクションを1987年、1988年度に収集し、整理、分類を行い、データベース化を図った。

「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」という名称は、当館でつけた便宜上の資料名であり、資料そのものに名称の記載はない。

アルバム（＝写真帖）は2冊一組で、表紙はどちらも青地に黒で縁取られた白い花柄の布製（図1）である。アルバムの外寸は、縦34.8×横28.0×厚さ4.0cm、内容は着物姿の女性の写真が1冊につき50枚、2冊で合計100枚収められている。写真のプリントのサイズはそれぞれ若干異なるが、ほぼ27×21cm程度である。写真は鶏卵紙という主に明治期に使われた印画紙に焼き付けられており、一枚一枚が手彩色で着色され、台紙に貼られている。写っている着物姿の女性は、「凌雲閣」と朱で書かれた団扇を持って中央に立っており、女性の右横の柱かけにも「凌雲閣」と墨で書かれた扇がかかっている（図2）。

当館ではこれまで、このアルバムを凌雲閣関係資料として展示、公開してきたが、写真の撮影者名を付すことはなかった。本論では、凌雲閣で行われた「百美人」展の展示写真が、明治から大正期に活躍した写真師、小川一眞（1860年（万延元）～1929年（明治4））の制作によるものであることから、このアルバムの撮影者を小川一眞と同定し、これに基づいて「百美人」が小川によってどのように商品化され、どのように社会に広まっていったかを考察する。

### ウィリアム・K・バルトンと小川一眞

既によく知られていることだが、この「凌雲閣」はイギリス生まれの衛生工学技師、ウィリアム・K・バルトン（William K. Burton / 1856-1899）が設計し、1890年（明治23）11月に竣工した高層タワー、通称「浅草十二階」である。凌雲閣は来場者を増やすためのイベントとして、当時人気のあった芸妓の写真を凌雲閣内に飾る「百美人」展を、竣工翌年の1891年（明治

---

\*東京都江戸東京博物館学芸員

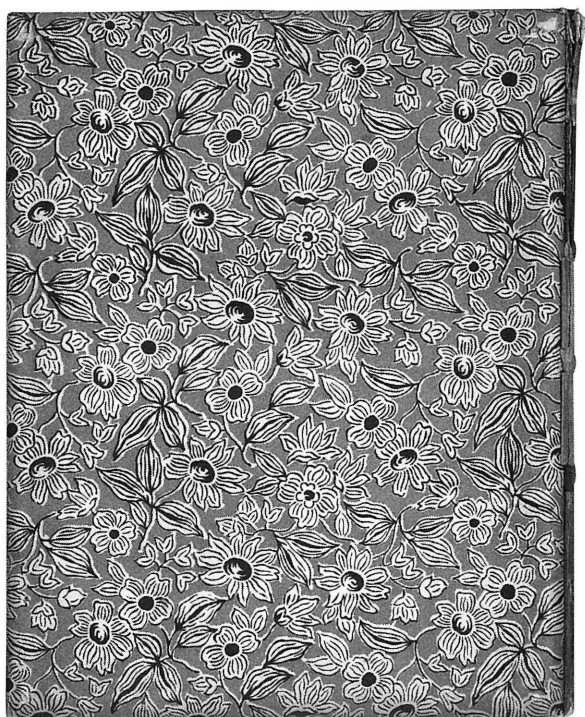


図1 「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」表紙

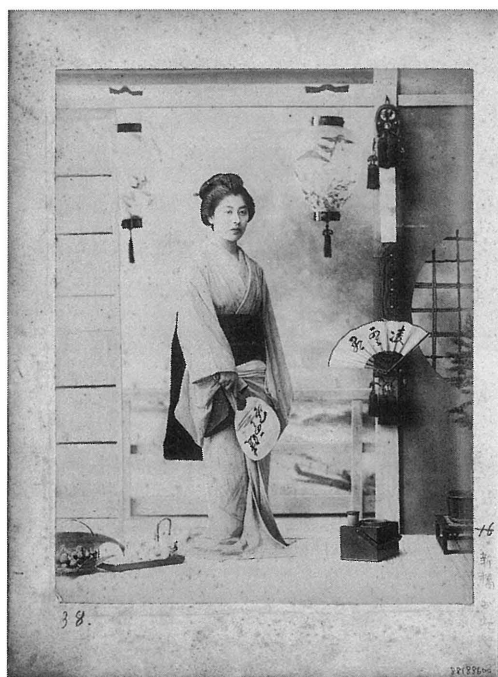


図2 「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」

24) 7月に開催しており、写真撮影を写真師小川一眞に依頼している。<sup>1)</sup>

埼玉県行田市に1860年（万延1）に生まれた小川一眞は、1873年（明治6）、東京の有馬学校に入学し、英国人教師を通じて写真術に出会う。コロディオン湿板法を習得し、1877年（明治10）、上州富岡で小川写真場を開業。その後渡米して写真印刷術、乾板製造法などを学んで帰国し、1885年（明治18）、東京の飯田町4丁目に営業写真館である玉潤館を開設する。凌雲閣からの依頼を受けた小川は、都内各所から選ばれた百名の芸妓の撮影を玉潤館で行った。

「百美人」展で展示された写真は、「縦横二尺余の額面を製し、四層より七層までの間に掲げ、その前に青竹の手摺を設らえ、盆栽を飾りて額面にふれざるよう注意せり。」<sup>2)</sup>とあるように、当時としてはサイズの大きな写真が制作され、凌雲閣の4階から7階までの間に飾られた。そして展示にあたっては、写真の前に手摺や盆栽を置き、触られないようにするなど、現在の美術展と同様の方法がとられた。

小川一眞撮影による「百美人」展が行われている時の凌雲閣の外観の写真が残されているが、そこには「百美人投票募集」の垂れ幕が外壁にさがっているのが確認できる（図3）。<sup>3)</sup>「百美人」展では写真の展示だけでなく、同時に、写真が展示されている百人の芸妓への人気投票が行われており、いわば写真による美人コンテストのはしりであった。

凌雲閣が小川一眞に撮影を依頼した理由は定かではないが、小川とウィリアム・K. バルトンは、バルトンが1887年（明治20）に来日して間もない頃に出会っている。帝国大学衛生工学講座の初代教授となったバルトンは、写真家としての側面も持っており、小川はバルトンから化学的知識を得、臭化銀ゼラチン乳剤の作り方や、プラチノタイプ法を学んだ。また国産の乾板製造を目指していた小川は、薬品の調合もバルトンに依頼している。

またバルトンは1889年（明治22）5月に設立された日本で最初の写真団体である日本写真会の結成にも深くかかわっている。

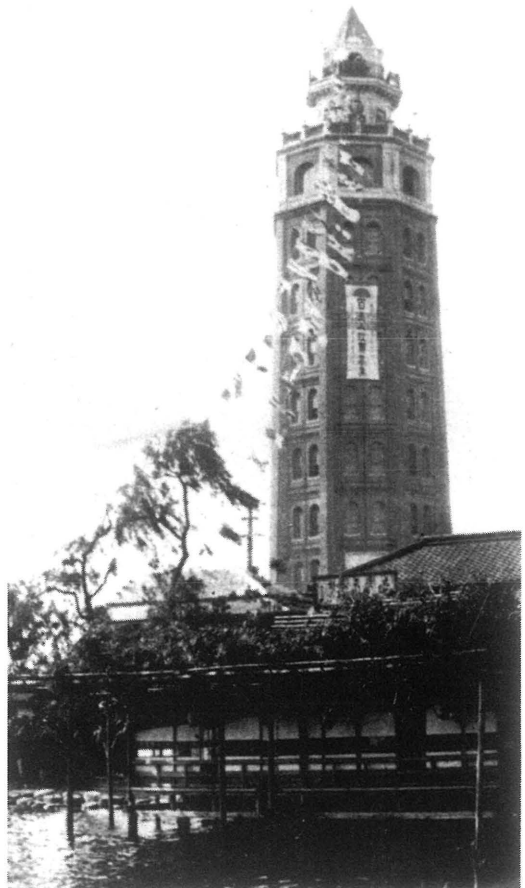


図3 凌雲閣の壁面にかかる「百美人投票募集」の垂幕

日本写真会の会長は榎本武揚、副会長は S.ビゲロー、菊池大麓（東京帝国大学理学部教授、後に学長）、書記がウィリアム・K. バルトン、会計には写真材料商の浅沼藤吉（浅沼商店）、そして委員に小川一真が就任した。発会式の記念講演会ではバルトンが小川一真の通訳により「白金印画写真（プラチナプリント）」について講演を行うなど、当時バルトンは日本写真会の中心的存在であった。小川から見たバルトンは、写真術の師であるとともに、日本における写真文化を発展させ牽引する存在であったであろうが、このバルトンと小川の関係から、「百美人」の撮影が依頼されたことは十分考え得る。

### 小川一真と「百美人」

前述のとおり、当館が所蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」には、鶏卵紙に着色された写真が100枚収められている。写っているのは着物姿で立つ芸妓であり、これらの写真を見比べると、背景や芸妓の周囲に写っているものなどがすべて同一であることから、撮影は、小川一真が玉潤館内に作った撮影用セットで行われたものと考えられる。

写真の中央に着物を着た芸妓が立ち、向かって左に葦戸、右に柱掛けを配し、芸妓の頭上には提灯が下がっている。背景には川があり、そこには小さな蒸気船が走っている。ここに描かれている川は隅田川であることから、このセットは墨田川沿いに建つ料亭の一室のような設定と考えられる。芸妓の足元には座布団、煙草盆、急須と茶碗、枇杷の実と葉が入った籠が置かれており、柱の手前には盆栽が置かれている。よく見ると盆栽には「苔香園」と書かれた札が鉢にささっている（図4）。

「苔香園」は、明治期盆栽界の先覚者と言われた木部米吉が築いた盆栽業者であり、東京芝にあった。明治中期は盆栽文化が発達し浸透し始めた頃であり、小川はそれをいち早く画面に取り入れ、流行の先端であることを表現したかったのであろう。写真に写っている盆栽の種類はすべて異なっていることから、小川は「苔香園」から盆栽を借りて撮影を行い、その代わりに「苔香園」と書いた札も一緒に写したと推察される。芸妓が持つ「凌雲閣」の団扇と同じく、写真を使って広告を行っているのである。

芸妓の足元に置かれている枇杷の実と葉が入った籠は、撮影が初夏であることを示している。また、暑氣払いの薬として、干した枇杷の葉に肉桂、天草などを切り混ぜて煎じた「枇杷葉湯」が飲まれていたことも理由であろう<sup>5)</sup>。加えて、中国では「枇杷門巷」（枇杷の花の咲くちまた）は芸妓の居住する場所を意味することから、それを意味する図像とも読み取れる。<sup>6)</sup>

この他、写真によっては「首おさえ」という器具の足の一部が写りこんでいるものもある。「首おさえ」は、体を固定するための器具であり、小川はスタジオ内で芸妓を美しく鮮明に撮るため、ポーズをとる芸妓が動いてしまわないように使用した。

写真が貼られているアルバムの台紙には、「日本橋 小せい」のように、新橋、柳橋、日本橋、

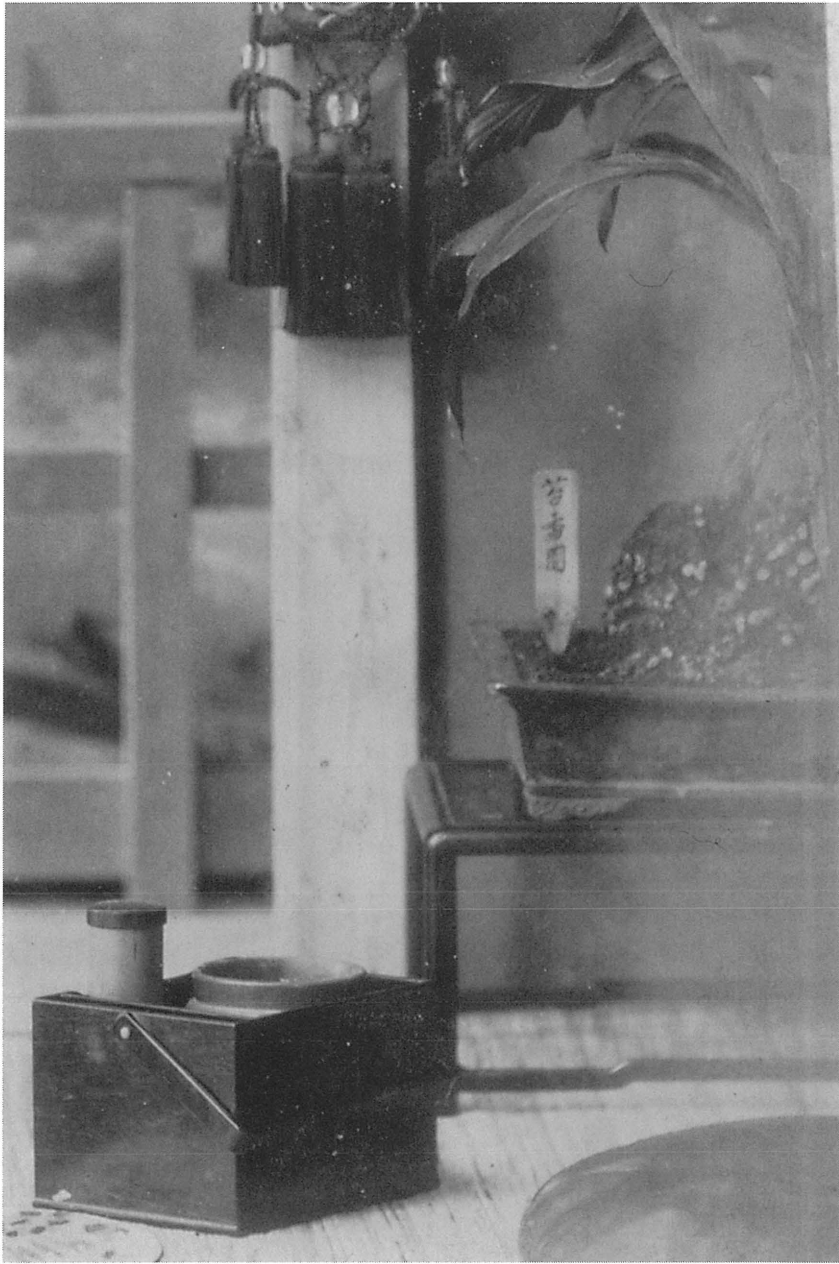


図4 「苔香園」と書かれた札がささった盆栽（図7右下部分拡大）

浅草、赤坂、吉原などの場所と芸妓の名前が鉛筆や朱で記されている。また、5点の写真については、「1 吾妻 本名 中岡せい 十七才（新橋）」（図5）、「2 小と代 本名 辻とよ 十九才（新橋）」（図6）、「3 桃太郎 本名 谷はな 十九才（新橋）」（図7）、「4 玉菊 本名 川口しよふ 十七才（新橋）」（図8）、「5 小つる 本名 藤井りき 二十八才（柳



図5 「1 吾妻 本名 中岡せい 十七才(新橋)」



図6 「2 小と代 本名 辻とよ 十九才(新橋)」



図7 「3 桃太郎 本名 谷はな 十九才(新橋)」



図8 「4 玉菊 本名 川口しよふ 十七才(新橋)」



図9 「5 小つる 本名 藤井りき 二十八才(柳橋)」

橋)」（図9）、と書かれた付箋がついており、これは人気投票の上位5人の名前である。これらの芸妓の情報は、所有者であった喜多川氏の手による可能性が高いが、100点全ての写真が同じセットを用いて撮影され、1点を除いて全ての写真に「凌雲閣」と朱で書かれた団扇を芸妓が持っている、もしくは「凌雲閣」と書かれた扇が柱掛けに飾ってあることから、当館が所蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」（2冊）は、小川一眞撮影による「百美人」展に展示された写真と同じものであると言えるだろう。

以上が当館の所蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」の特徴であるが、これと同じ原板ネガから制作されたと考えられるアルバムを横浜美術館が所蔵している。横浜美術館所蔵のアルバムも当館所蔵のものと同じく、資料そのものに名称その他の記載はないが、収蔵品目録には、「小川一眞『百美人展（浅草・凌雲閣）のアルバム』1891年（明治24）」とあり、撮影者を小川一眞、制作年を1891年（明治24）と特定している。アルバムのサイズは縦35.0×横27.5×厚さ4.4cmと当館所蔵のものとほぼ同じであり、プリントサイズも写真により若干異なるが、約26×20cmとほぼ同じといっている。

横浜美術館所蔵のものも布張りの表紙がついており、台紙に彩色を施した写真が貼り付けてあるのは当館所蔵のものと同じであるが、製本は折本仕立てになっており、収められている写真の点数は38点と少ない。また当館所蔵のものと大きく異なる点は、1点1点の写真の左下に、「Kotoyo,Shimbashi」のように、アルファベットで芸妓の名前が表記されていることである。当館所蔵の写真貼と横浜美術館所蔵のアルバムを比較した結果、横浜美術館所蔵のアルバムの38点の写真は、当館所蔵の100点の中に含まれる写真と全て一致した。よって横浜美術館所蔵のアルバムは、撮影された100点の写真の中から、注文主の選択に応じてプリントを作成し、折本に仕立てて販売したものと考えられる。

またこの他に、同じく小川によって撮影された芸妓の写真を使った写真集も出版されている。『Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo』（筆者が確認したのは国際交流基金所蔵本）というコロタイプ印刷の写真集である。写真集の外寸は縦40.4×横30.3cmであり、表紙に「By K.Ogawa, Photographer, No. 1, Iidamachi, Shichome, Kojimachiku, Tokyo, Japan. In Phototype & From Photographic Negatives Taken by Him」とあることから、この写真集は小川一眞が撮影した原板ネガからコロタイプで印刷したことがわかる。ちなみにここに記載されている「麹町区飯田橋四丁目」は、当時の玉潤館の住所である。この写真集には12点の写真が掲載されており、1点1点の上に「Kotoyo,Shimbashi<sup>7)</sup>」と印刷された薄葉紙がかかっている。当館所蔵の「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」と照合してみると、印刷にあたって原板ネガからトリミングせずに掲載しているため、芸妓の周囲の情景部分が多く写し込まれており、写真図版のサイズも約28×22cmと若干大きい、12点中7点が同じ原板ネガを使っており、また3点については、芸妓の顔の角度が少し違うだけで、同じ時に撮影した別カットのネガを使用していることがわかる。この写真集は、写真と芸妓の名前がアルファベットで記されているのみで、解説



などは一切なく出版年も記載されていないが、玉潤館の住所が記載されていることから、「百美人」展が開催された1891年（明治24）から間もなく出版されたと考えられる。

国際交流基金所蔵の『Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo.』の他に、本のタイトルは『Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo.』と同じではあるが、表紙に書かれている情報が、「By K.Ogawa, Photographer, Tokyo, Japan. In Collotype. Sole Agents Kelly and Walsh, Limited. Yokohama, Shanghai, Hongkong and Singapore.」となっている写真集がある（筆者が確認したのは国立国会図書館所蔵本）。この本の奥付を見ると、発行は1895年（明治28）6月、編纂兼印刷発行者が小川一眞、印刷所は小川写真製版所本店（東京市神田区三崎町三丁目壹番地）、売捌元は小川写真製版所支店（東京市京橋区日吉町拾三番地）となっている。内容は、芸妓の上半身が楕円形の枠内にトリミングされた写真がコロタイプ印刷で105点掲載されており、1点1点の写真の下には芸妓の名前がアルファベットと漢字の両方で記されている。これらの写真を当館が収蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」と照合したところ、105点のうち92点は同じネガを使用し、5点は同じ時に撮影した別カットのネガを使用していた。よってこの写真集も玉潤館で小川一眞が撮影した原板ネガを使って印刷したことがわかる。

横浜美術館が所蔵するアルバムと、国際交流基金所蔵のコロタイプ印刷による写真集『Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo.』は、和文表記は一切なく、写っている芸妓の名前のみがアルファベットで明記されていることから、これらは外国人向けに制作され、販売されたものと考えられる。もう一方の国立国会図書館所蔵の『Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo.』は、芸妓の名前が和英併記であることから、こちらは海外のみならず、国内での販売も視野に入れていたと推察される。

このように小川一眞は、凌雲閣での「百美人」展のために撮影した写真を使って、写真帖の制作や写真集の刊行などを行ったのであるが、「百美人」の写真展示も凌雲閣以外の場所で行われており、小川は、1903年（明治36）の3月1日から7月31日に大阪で行われた第5回内国勧業博覧会で「百美人」展を開催している。

ここでの「百美人」展は、東京に京都、大阪を加えた「三都百美人」展であり、「百美人」の撮影が、その後京都や大阪でも行われたことがわかる。この時の展覧会会場の写真を見ると（図10）、建物の一番上には「美術写真館」という看板が掲げられ、その下に「百美人」、建物に垂直に立っている大きな看板に「小川一眞撮影 百美人」とある。

「美術写真館」という看板の意味はいくつか考えられ、彩色した写真のそのものを「美術写真」ととらえ、それを展示する場であることからこのような名称をつけたとも考えられるが、この写真を見ると、ここが単なる写真撮影スタジオではなく、写真を鑑賞するための場所でもあることを示すために「美術写真館」としたというようにもとれる。また、第5回内国勧業博覧会では「美術」という言葉が流行し、様々なものに「美術」が冠せられた<sup>8)</sup>。よって小川もその影響を受け、自身の写真館に「美術」をつけた可能性は高い。そして「小川一眞撮影 百美



人」という看板からは、小川の自身が撮影した写真に対する自負が伺える。

この写真の左の部分にはテントのようなものがあり、大小の写真が並べられている。これはお土産売り場のようなものと考えられ、展示してある写真と同じものがここで注文、購入することができたのであろう。

これを見ると、当初は凌雲閣の依頼で撮影され、客寄せのためのイベントとして企画された「百美人」の写真展示が、その後は小川一眞自身による興業へと変貌していったことがわかる。



明治卅五年第五回内國勸業博覧會（大阪）会場内に於ける  
小川一眞撮影三都百美人大寫真展覽會々場

## まとめ

図10 「三都百美人展」会場外観  
『創業紀年参十年誌』小川同窓会、1913年 掲載

写真師で唯一帝室技芸員を拝命し

た小川一眞の業績を語る時、1888年（明治21）に実施された近畿宝物調査での写真撮影。1889年（明治22）10月に岡倉天心、高橋健三らによって創刊された美術雑誌『国華』や1900年に出版された、仏文による日本美術史本『Histoire de l'Art du Japon』の写真図版の制作。『日露戦役写真帖』の出版など、近代化を目指した明治政府と歩調を合わせて行った記録撮影、印刷、出版事業などの部分に光が当てられることが多く、一般大衆に向けての活動は見落とされがちであった。その理由のひとつとして、営業写真館である玉潤館で小川が撮影した写真があまり残されていないことが挙げられる。凌雲閣で行われた「百美人」展で展示された写真についても、これまで知られていたのは『Types of Japan Celebrated Geisha of Tokyo.』のようなコロタイプ印刷による写真集であり、プリントに焼き付けられ彩色が施されたものとしては、横浜美術館が所蔵する「小川一眞撮影『百美人展（浅草・凌雲閣）のアルバム』」の他、『Japan』や横浜写真アルバムの中に含まれているもの以外、確認されていなかった<sup>9)</sup>。よって当館が所蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」は、「百美人」展に展示された写真の全貌がわかる貴重なものである。

凌雲閣で行われた「百美人」展のような、小川の初期の頃の商業的な活動によって、写真が社会の中でイメージを共有し、時代のアイコンを生み出すことができるメディアとしての役割を

確立したことはもっと評価されて然るべきであろう。近代化する日本において、人々の生活に写真が浸透する課程で果たした小川一眞の貢献は大きい。

【註】

- 1) 「凌雲閣 自動人形など趣向をこらす」[明治24年 6月17日 時事]『明治ニュース事典』（第四巻）804-805ページ、株式会社毎日コミュニケーションズ、1985年（第三刷）
- 2) 同上
- 3) 本資料は、稲場紀久雄氏にご提供いただいた。
- 4) 1) に同じ
- 5) 『江戸語辞典』大久保忠国、木下和子編、東京堂出版、1991年  
『講談社学術文庫 江戸語の辞典』前田勇編、講談社、1979年
- 6) 『中国の花物語』飯倉照平著、集英社、2002年  
「枇杷葉湯」ならびに「枇杷門巷」については、清泉女子大学日文科教授佐伯孝弘氏にご教示いただいた。
- 7) 横浜美術館所蔵の「小川一眞撮影『百美人展（浅草・凌雲閣）のアルバム』に記載されている新橋の英文表記は、全て「Shimbashi」であり、『Types of Japan Celebrated Geysa of Tokyo』では「Shinbashi」と記載されている。
- 8) 「由来美術なる語の妄用せらるゝや甚し。美術なる語の却て醜術的に価値を下落せるや嘆ずるの外なし。美術おしろい、美術下駄、美術傘、何ぞ夫れ美術の妄用せらるゝや。美術衛生歯磨の如き何の意ぞ。甚しきは美術営業と看板せるあり。何ぞ人を愚にするの甚しきや。先生の価値下落して先生といはるゝ程の馬鹿でなしと聞く。美術家といへば一方には嘲笑の意味なしとせず。真の美術家よ、警世一番、真価を発揮しては如何。我は曾て美術家（？）中に大日本美術学士と名刺にも肩書きし、又其画にも落款したるを見たり。名は実の實なりといへば美術なる語の醜の意味を発揮したるものか、腐漢誠に是れ斯道の蠹毒か。」杜撰生稿「美術放言録」より一部抜粋  
（『図按』第14号16ページ、大日本圖按協會編、本田雲錦堂出版、1903年 5月発行）  
本資料については東京文化財研究所 文化形成研究室長 塩谷純氏にご教示いただき、第5回内国勸業博覧会開催時「美術」という言葉が多用され、「美術写真館」という名称との関連についてもご指摘いただいた。
- 9) 当館が所蔵する「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」の中に含まれている写真と同じ写真1点  
が、『Japan : described and Illustrated by the Japanese / written by Japanese authorities and scholars ; edited by Captain F Brinkley of Tokyo Japan, with an essay on Japanese Art by Kakuzo Okakura, director of the Imperial Art School at Tokyo Japan, ; published by J.B.Millet Company ; Boston Mass U.S.A. Copyright,1897』（全10巻）のEdition de Grand Luxe版にも掲載されている。しかし、『Japan』はエディションや形態がいくつかあり、掲載されていないものもある。また、撮影者不詳のような横浜写真アルバムの中にも、「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」の中に含まれている写真と同じ写真を見ることができる。  
小川一眞は、この他数多くの「百美人」写真集を刊行しているが、それらは凌雲閣での展示作品とは異なる写真によるものである。

小川一眞撮影「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」についての考察

『東京都江戸東京博物館 研究報告 第15号』（2009年3月）

正誤表

該当箇所	誤	正
97 頁 7-8 行 目	「百美人」展で展示された写真は、「縦横ニ尺余の額面を製し、四層より七層までの間に掲げ、 <u>その</u> 前に青竹の手摺を設ら <u>え</u> 、盆栽を飾りて額面にふれざるよう注意せり。」	「百美人」展で展示された写真は、「縦横ニ尺余の額面に製し、四層より七層までの間に掲げ、 <u>其</u> 前に青竹の手摺を設ら <u>へ</u> 、盆栽を飾りて額面にふれざるよう注意せり。」
102 頁 1 行 目	などは一切なく出版年も記載されていなが、	などは一切なく出版年も記載されていないが、
104 頁 【註】1)	「凌雲閣 <u>自動人形など趣向をこらす</u> 」[明治 24 年 6 月 17 日 時事]『明治ニュース事典』（第四卷）804-805 ページ、株式会社毎日コミュニケーションズ、1985 年（第三刷）	「凌雲閣の改良趣向」『時事新報』1891 年（明治 24）7 月 17 日